

Alert 反天皇制運動 35 号

[通巻 417 号]
2019 年
5 月 7 日発行

第 X 期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert 〇この連続行動の成果を天皇トランプ会談にぶつけていこう! — *2
反天ジャーナル 〇 — トメ吉、テレビっ子、橙 *3
状況批評 〇『国体論』ノート — 松葉祥一 *4
追悼 高橋寿臣さん 〇 — 末田亜子 *6
太田昌国のみたび夢は夜ひらく (107) —
〇「開明的な現代性」と神話・宗教世界の平和共存 — 太田昌国 *7
マスコミじかけの天皇制 (34) 〇 (象徴天皇教) の (朕朕詐欺) に抗して
— (壊憲天皇明仁) その 32 — 天野恵一 *8
野次馬日誌 — *9 集会の真相 — *10 反天日誌 — *11 集会情報 — *12

反天 WEEK は 4 月 28 日の文京区民センター、30 日の新宿東口アピール、5 月 1 日の銀座デモに参加した。この 3 年間で 2 回も手術をしてすっかり行動力が衰えたが、どうしてもと出かけて、一握りの充実感があった。

そして翌 2 日には黒人映画監督スパイク・リーの『ブラック・クランズマン』を観る。1970 年代のアメリカで人種差別組織 KKK に潜入したアフリカ系とユダヤ系の警官たちの物語である。なんで黒人が白人至上主義の団体に? という話は爆発的に面白くて、めっちゃくちゃやこしいから、この 30 倍費やしても書き足りない。もうこれは実際に観て聴いてリズムに乗ってもらわなければならない。

映画館は若い人たちでいっぱい。隣にはカップに満載されたポップコーンとコカコーラを抱えたカップル。筋肉ムキムキの浅黒いお兄さんはバリバリとコーンを頬ばりながら、この複雑でいながら爽快な皮肉とジョークに満ちたスクリーンに笑いと熟睡を繰り返している。

電話口で黒人デカが繰り出すサラッ南部ナマリが混じった正統英語のヘイトに、ころっと騙される「声の潜入」。KKK の指導者がトランプに重なる巧妙な仕掛けだ。私の耳にはつい一昨日に新宿東口広場で浴びせられ続けた罵声が残っている。「お前ら朝鮮人だろ! あ的地獄へ帰れ!」。駅ビル側で声を囁らしていた男は現業労働者らしい肌の色と筋骨だった。

映画を観たのは日比谷シャンテ。5 月 1 日の集会を持ったニュー新橋ビルから歩いて 10 分ちょっとだ。この満員の観客たちとデモ隊の 500 人を隔てる距離を縮めたい。かつて私たちが映画館を出ると、足の裏から闘いの熱を感じた。
(平井玄)



250 円

●定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL / FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net

今月の

Alert

この連続行動の成果を 天皇トランプ会談にぶつけていこう！



四月三〇日、明仁が「退位」し、五月一日には徳仁が「即位」した。私たちは、四月二七日から「終わりにしよう天皇制！反天WEK」として、五月一日までの五日間という異例の連続行動を呼びかけた。

まず参加者の数を連ねよう。四月二七日に練馬のグループの主催で行われ、私たちにいつも助言してくれている歴史家の伊藤晃さんが話された集会は、一〇〇名の参加者を得た。かつてサンフランシスコ条約でヤマトが占領下から脱却すると同時に、天皇により米軍基地の島として売り渡された四月二八日の沖縄デー集会は、一二〇名の参加者。恥知らずにも戦争責任を否定し続けた裕仁の誕生日を記念日とする四月二九日には、立川で、昭和記念公園、昭和天皇記念館、さらに自衛隊基地に向けたデモ行動が取り組まれ、一五〇名の参加者。さらに四月三〇日には、明仁退位の

一連の儀式が実施される時間に合わせて、新宿東口アルタ前広場で二時間にわたって「退位で終わろう天皇制！新宿大アピール」を展開し、見た目は警察に封じ込められているかのとき状況ながら、心から自由なアピールを展開、数多くの友人知人たち一五〇名が参加してくれた。

そして迎えた五月一日、新橋での集會に参加してくれた人びとの発言はいずれも重く大切なものだったが、さあデモへの出発をいとうとき、並んでくれた列は驚くほど長く続いて、実数で五〇〇名の参加により銀座を歩くことができた。人の列をふり返ったとき、雨

の中ということもあってか最後尾が見えず、心の底から熱いものがこみ上げてくるのをおぼえた。

この時期には、全国各地でいくつもの取り組みがなされており、「天皇制批判」を正面から掲げたものでなくとも、この「奉祝」状況に対して批判する発言が多く飛び交ったはずだ。私たちはいまなお微力ながら、天皇制を批判する大衆的な運動としての確かな手ごたえを感じることができたと、きっぱりと言いつけておきたい。

◎

新天皇となった徳仁は「即位後朝見の儀」において「常に国民を思い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国及び日本国民統合の象徴としての責務を果たす」と述べた。三〇年前の明仁の即位に際しての発言には「日本国及び日本国民統合の象徴としての責務」というものはない。もちろん日本国憲法上には「象徴」という定義こそあれ、このような天皇の「責務」などないわけで、これこそが、明仁がその天皇としての活動を通じて造り上げてきた「象徴としての行為」ということだ。私たちがくりかえし批判し、憲法学者からも指摘されてきたように、「象徴としての責務」「象徴としての行為」は、法に記述もされず定義のための論議も経由せず、憲法の制約から離れて天皇自身によつてのみ位置づけられている、いわば天皇の「フリーハンド」となっている領域だ。これは、時代状況、政治や社会状況に応じて、皇室祭祀や

「祈り」というパフォーマンスの宗教行為とともに、今後はさらにさまざまな内容をもって繰り出されてくるはずだ。

天皇の「代替わり」状況は、これからまだまだ続く。この秋には即位礼や大嘗祭を中心としたスケジュールがすでに組まれている。「奉祝」の宣伝が政府やメディアにより広報され、多幸性の空気が支配するそのなかで、安倍政権の国内での独裁強化が、アメリカの政治的軍事的影響へのさらなる拝跪として立ち現れ、同時にアメリカの黙認の下での日本国憲法の改悪までも具体化する可能性が十分に考えられる。

安倍は、これに乗じてアメリカのトランプ大統領の訪日を具体化させた。五月二五日から二八日までの「国賓」としての訪日においては、アジアの隣国など他国にさきがけてトランプと徳仁の会談が行なわれる。日本経済への干渉によりさらに産業構造がゆがめられ、もっと悪いことにアメリカの軍事産業への奉仕のために、欠陥機ともいわれるF35やオスプレイなどをはじめとする武器購入が進められるだろう。徳仁とともに、新皇后となった雅子も、元外務官僚としてのキャリアを発揮するかもしれない。安倍のおべっかも大量に流されるだろうし、何一つとして良い方向性が出るとは考えられない。私たちは五月二六日に新宿においてデモを準備している。日米同盟・安保強化の天皇外交を許すな！行動に多くの人びとの参加を呼びかける。

(編蝠)

性別を自分で決められる社会に

「体重二五八グラムで生まれた男の赤ちゃんが無事退院」という四月一九日のニュース。医療について論じたいわけではない。そんなに小さいのに男というレッテルを貼られなくちゃならないのが、とため息が出た。／この社会では自分の性別を自分で決めることができない。医者という赤他人に、しかも女が男かという二者択一で勝手に決められる。生まれた時の身体の見かけと、そのあと育まれていく性自認が一致しているとは限らないことが、昔から経験的に知られているのにも関わらず、である。／ベビー用品売場にくくと、商品が女の赤ちゃん用、男の赤ちゃん用に分けて整然と並べられている。「その他」はない。おもちゃを女の子用と男の子用に分けたのは、玩具メーカーとそのライセンサーのアニメ会社が儲けるためだと聞いたことがあるが、そのせいで、どれほど多くの子どもたちが、時には死のうと考えるほどつらい思いをしてきたことが。／女・男という性の二分法はやめよう。性別を自分で決められる社会をつくろう。「女の赤ちゃん」「男の赤ちゃん」という言い回しに接したときの軽い違和感は、子どもと性に対する認識が今とは違う形であった社会の、かすかな記憶を伝えている。

(トメ吉)

「行く年来る年」じゃないっつーの!

四月一日に新しい元号が発表されてからずっと、毎日が「皇室アルバム」のような鬱陶しいテレビ・新聞の報道が続いたけど、退位・即位の二日間はまだあひどかったね。そういえば、この国は毎年の大晦日にそれまでのことをナシにするのが得意だったわと思うのだが、今回はそれ以上だった。この三〇年をひとくくりにして美しい物語として描く。原発事故も五〇〇人集まった天皇制反対デモもなかったように。過剰に煽って「祝え」と大号令をかけているのはもちろんマスコミだけでなく、その期待以上に応える「国民」の姿を、それはウソなく映し出していく。

それにしても、「国民」は商魂たくましい。元号グッズも元号またぎイベントも盛り沢山。ちゃんとそれに群がる人がいる以上、それは成功しているのだろう。ホームセンターに出かけたら、元号Tシャツ着てる人いた。「元号越しそば」には笑えたし。皇居やその周辺には天皇制を身体で感じたい人もたくさんいる。冷たい雨のなかスラブで儀式を見ている。テレビでいいじゃんと思うけど、そうじゃないのが天皇制だわ。はあ。

改元も代替わり儀式も安倍のいいようにやられた感が強い。でも痛々しいほど刹那的に騒いでるだけの「国民」の姿は、やはり何かの終わりを映し出している気がする。

(三ツツツ)

認証する者される者

五月一日、ナルヒトが天皇になった。一〇時半からの「剣璽等承継の儀」を経て一一時過ぎ、「即位後朝見の儀」で即位を宣言。そして二時過ぎ、新天皇初の国事行為、「認証官任命式」。これが天皇即位当日の流れという。

で、誰を認証するかというと、自分の側近として世話をやいてくれる新侍従長と、明仁上皇の世話係・上皇職トップの上皇侍従長の二人だ。憲法七条五項で天皇は、「国務大臣及び法律の定めるその他の官吏の任免並びに全権委任状及び大使及び公使の信任状を認証する」とあり、侍従長と上皇侍従長は認証官と呼ばれる、天皇の認証を必要とする官吏となっている。というわけで、まあ、報道の通り、新天皇初の国事行為ではあるのだな。天皇の世話係が国の首相などに並ぶ「認証官」であり、天皇になって最初の「国事行為」がその認証にあるとは、やっぱりすごいもんだね。お偉いっただらありゃしない、としかいいようがない。ところで、そういうお偉い天皇を認証する者はいないよね。でも、よくよく考えると、皇位の証としてあるあれ、「三種の神器」を受けとることか? ちょい前にやった「剣璽等承継の儀」? やっぱり天皇を認証するのは神だったか。うひゃ。

(橙)

状況批評

思想・状況・批評

『国体論』ノート

松葉祥一（哲学）

国体の概念は、厳密な議論をするためには、あまりにも多義的で曖昧である。曖昧だからこそ為政者たちは自分に都合のよい解釈を与え、民衆の反論をはぐらかし、民衆を不明なまま納得させるのに有効だったのではないか。明治期から敗戦まで、「国体」は為政者にとって都合のいい抑圧の概念として使われてきた。なすべきことは国体概念の含意をできるだけ精確に分析し、その矛盾点を明らかにすることであろう。私はこれまでも象徴天皇制の本質をとらえるために、たとえば西田幾多郎の国体論を検証しながら考えてきた（松葉「西田幾多郎における『場所の論理』と天皇制」立命館言語文化研究1994）が、白井聡の『国体論』（集英社新書2018）には強い違和感を抱いた。

1、国体とは何か

暫定的な結論だが、これまで法学や哲学などで使われてきた「国体」の規定は、次の四つの含意をもっている。論者によって、どれか一つに限定できる場合もあるが、たいていの場合いくつかの含意が混在している。

（1）政治学上の一般概念として。「君主国体」や「共和国体」のように主権の帰属によって政治形態を区別するために用いられる。政体の誤用だと指摘する論者が多い。しかし、この含意があることによって、この語に普遍性の装いが与えられることになる。

（2）政治学上の特殊概念として。日本における天皇の統治による政治体制を指す。その意味で天皇制と同義。「天皇制」が批判者によって使われることが多いのに対して、「国体」は賛美者によって使われることが多い。最も広く使われてきた含意。

（3）神話学・宗教学上の概念として。国生み神話に基づく天皇の神聖性、およびその君臨の持続性を指す。たいていの場合、天皇制の正当性を支える根拠として用いられる。

（4）文化人類学上の概念として。広義では日本の精神文化の特性を漠然と指す。狭義では家父長を中心とした家族結合のあり方や「君臣情誼関係」を指す。これが天皇を家父長とする家族的国家制度としての天皇制の正当化に用いられる。

調べてみると、国体概念は、強調点の違いはあるとしても、（3）神話学的・宗教学的含意と（4）文化人類学的含意にもとづく（5）天皇制という意味に用いられており、

それは和辻哲郎らが編纂に加わった『国体の本義』（1937）において一つの完成形をなしていることがわかる。そして戦後、和辻に典型的に見られるように、天皇制を神話・宗教や精神文化から切り離すことによって、「国体」を神話・宗教や精神文化の意味に限定することによって、戦後も維持しようとする試みがなされていることがわかる。しかし、この二つの側面は原理上切り離すことができない。「王の二つの身体」が明らかにしたように、同時に政治と宗教という二つの側面＝身体をもつことが、王の権威の根拠だからである（カント・ローウィチ「王の二つの身体」ちくま学芸文庫2003）（松葉「哲学的なものと政治的なもの」青土社2010）。国体概念の両義性は原理的なものである。

では、白井の『国体論』において国体概念はどのように使用されているか。

2、『国体論』における国体概念

白井によれば、同書の目的は、国体を軸として、明治維新から現在に至るまでの歴史を把握することである。その結果明らかにするのは、「戦前の国体」が万世一系の天皇を戴いた家族国家を全国民に強制する体制であり、反对者を圧殺して破滅的戦争に踏み出し、内外に膨大な犠牲者を出したあげくに崩壊した。それに対して「戦後の国体」は、アメリカを日本の天皇より構造的に上位に置く形に「フルモデルチェンジ」し、今日まで継続しているが、いまや、「戦前の国体」と同様「国体の弁証法」を経由して、国民を再び破滅に追い込むうとしているということになる。

敗戦後も天皇制は形を変えて継続しているという主張は、前著『永続敗戦論』（太田出版2016）におけるアメリカ追従政策への批判につながっており、説得的である。そして「戦後日本の対米従属の特殊性とは、つまるところ、天皇制の問題であるという命題」（白井、内田樹「対談」いまなぜ「国体」なのか「青春と読書2018」）からは、対米従属政策を打破するためにも、天皇制を打破する必要があるという命題が導き出せる。

しかし、『国体論』の結論は、そうはなっていない。2016年8月8日、明仁が退位の決意を述べた「お言葉」について、白井は、「この人は、何かと闘っており、その闘いには義がある」と確信し、「お言葉」の呼びかけに「応答せねばならない」と感じたと書く。

白井は、「お言葉」の真意は、天皇が日本国民の安寧と幸福を「祈る」ことに見出し、それによって国民統合を呼びかけている点にあるという。この折りは、行為者が祭司である以上、宗教的行為にほかならない。言いかえれば、原武史が言うように、憲法で規定された国事行為よりも憲法で規定されていない宮中祭祀こそが「象徴」の中核だと天皇自身が語ったことになる（北田暁大「終わらない『失われた20年』」筑摩書房2018）。ここで白井は、憲法第20条をもちだすまでもなく政教分離は民主主義の原則

であり、特定の宗教の主宰者が「国事行為」を含む政治に関わることの危険性は歴史が示して余りあると反論するのではなく、「祈り」という宗教的行為が天皇制の中核にあることを認め、それを絶賛しさえするのである。「天皇はその祈りによって、日本という共同体の霊的中心である」(強調引用者)。

さらに白井は、「お言葉」による「アメリカを事実上の天皇と仰ぐ国体において、日本人は霊的・体性を本当に保つことができるのか、という問い」(強調引用者)に国民が応えることを求める。「お言葉」が歴史の転換を画するものでありうるということは、(……)潜在的にそうであるにすぎない。その潜在性・可能性を現実態に転化することができるのは、民衆の力だけである。民主主義とは、その力の発動に与えられた名前である。」(強調引用者)。この「お言葉」に応じて民衆が立ち上がり、安倍政権に代表される対米従属レジームを打倒して歴史の転換を果たすという白井の構想が危険なのは、そこに出現するのは、国民統合を天皇の「祈り」による霊的・体性に求める排外的ナショナリズムの動きではないということである。

こうした蹉跎の原因が「国体」概念の両義性をとらえそこねたからではないかというのが、私の仮説である。白井は、「天皇制あるいは国体を、基本的にあくまで近代日本が生み出した政治的社会機構の仕組みとしてとらえることに限定した」と述べ、国体概念を天皇制の含意に限定して使用し、神話・宗教的含意では使用しないと宣言している。しかし、すでに述べたように両者は原理上切り離せない。分離したとしても他方の含意が見ない裏面として効果をもたらすことになる。

白井自身もそのことを認めている。「近代日本の公式イデオロギーとなる国体概念、すなわち『神に由来する天皇家という王朝が、ただの一度も交代することなく、一貫して統治しているという他に類を見ない日本国の在り方』」(強調引用者)。あるいは、「実質的権力(政体)と精神的権威(国体)が分かれてある」ということだ。この考え方は、近代の国体の最大の危機(＝敗戦と占領支配・属国化)において、やがて巨大な役割を果たすことになる。「ここでは国体概念の天皇制としての含意が、神話学的・宗教的含意や精神文化的含意と切り離せないことが指摘されている」。

国体概念の両義性に足をすくわれた結果、国体＝天皇制を打破すべきだという結論に至らず、アメリカの支配(戦後の国体)を打破すれば望ましい国体＝天皇制が実現される、われわれが目指すべきところはそこにあるという結論にとどまることになっている。

3、民主主義と天皇制は両立しえない

白井は、新元号発表時の新聞への寄稿(「寄稿——新元号『令和』発表」山陽新聞2019年7月)で、「天皇制は民主主義と両立し得ない」と明確に述べている。「民主主義は、あらゆる生得的な特権者の存在を否定する原理だ。つまり戦後日本社会の根本

原理からは、天皇が果たすべき役割は自動的にには出てこない」(強調引用者)からである。しかし、次のように続けている。「お言葉」について「(……)天皇が無用になるか、民主主義が失われるという切迫感がここにはある。今上天皇が出した答えは、祈りにおいて『無限責任』を引き受けることだった。日本国民の安寧と幸福はすべて、天皇の祈りの力にかかっているとしたのである。思うにこの今上天皇の回答は見事だ」。

ここで白井は、天皇制が民主主義かという問いに対して、不要なのは天皇制だと答えるのではなく、否定したはずの「天皇制民主主義」(白井「国体論」)によって答えているように見える。真の民主主義に移行するまでの時期、天皇制も利用可能だと考えているようだ。内田樹との対談では次のように述べている。内田の「プラグマティックに考えたら、天皇制は国民に残された貴重な政治的資源ですから」(白井、内田前掲)という発言に対して、白井は、「日本は戦前も戦後も、ナショナリズムは形成されたけれど、国民国家の建設には微妙に失敗していて、まともな統合原理をつくれなかった。だからもう一度やり直す必要が出てきている」(白井、内田前掲)と答え、「お言葉」に依って国民の統合を取り戻すべきだと繰り返している。

このような過渡的天皇制擁護論は、自らの議論の前提を裏切っている。天皇制と民主主義は両立不可能だというのは強い前提であり、存在論的前提を異にする。両者は人間存在の平等性についての立場が異なるからである。

私は、天皇制はどのような形態であれ民主主義と両立し得ないと考える。なぜならそれは宗教性と世襲制を前提にしているからである。そして民主主義が天皇制のいずれが生き残るべきかと問われれば、生き残るべきは民主主義であり、平等だと答える。

一九二四年五月一日、市ヶ谷刑務所で、予審判事、立松に天皇制をどう考えているかと問われて、金子ふみ子は「天皇の正体は一個の人間です。わたくしも人民とまったく同一な自然的存在です。平等であるべきはすのものです」と、次のように答えている。

「私はかねてから人間の平等ということを考えています。人間は人間として、平等であらねばなりません。(中略)自然的存在たる基礎の上に立つ人間の地上における人間的行動は、ことごとく人間であるというただ一つの資格によって、一様に平等に承認されるべきはすのものです。しかるに、この自然的な人間的行為を人為的な法律によって、どんなにひどく歪めたり、否定したりしているかということを考えてもらいたいです。本来平等であるべきはすの人間が、現実の社会において、天皇というもののために不平等化されていることを、わたくしは呪うのです」(「反天皇制」社会評論社1990所収)。

私は、これに付け加えるべき言葉を知らない。

追悼 高橋寿臣さん

末田亜子（反天連OB）

今、私の手元に二本の原稿がある。一本は『天皇代替わり』との闘い 昭和Xデーについて』、一本は『かつて十・八羽田闘争があった』、そして『続全共闘白書』へのアンケート回答紙である。いずれも高橋寿臣さんから亡くなる数日前に「プリンタの調子が悪いので刷っておいて」と頼まれたものだ。原稿はすでに掲載予定の雑誌や機関紙に送られてはいたが、周辺にも配りたいとのこと、亡くなったその週にも手渡す予定になっていた。高橋さんの手に渡すことはもうない——原稿を手に私はいまだ呆然としている。

私が高橋さんと初めて会ったのは、一九八四年の反天連の立ち上げ時だった。救援運動を担っていたグループ・個人を中心に十数人が高円寺の事務所に集まり、反天連の運動をどうつくっていくかを話し合った。そこで、ひとときデモンション高く大声で喋り、ガハハと陽気に笑う、それが高橋さんだった。当時、彼は「靖国問題研究会」の一員として参加し、靖国神社問題という視点を反天連運動に提示した。靖国神社との出会いは反天連にとっても大きかったと思う。全斗煥来日、中曽根の靖国神社公式参拝……、Xデーに向けて私たちは文字どおり走り続けた。

そのなかで高橋さんがしばしば口にした言葉が「課題にこだわらる」であった。ヒロヒトXデー後の一九八九年の4・29を闘った後に彼が反天連ニュースに載せた一文がある。それまで共に反天連を闘った人々から、もっと幅広い課題での運動を起こして

いくべきという声があり、それに対しての文である。「……私たち、心の狭い。反天連は、このような時いつも、戦後大衆運動史の中で度々現れてきた『幅広主義』運動の質を問わない『多数派形成論』や、それと必然的に結びついている運動のリーダー達の『課題ころがし』のスタイルの繰り返しでは？と、胡散臭さを感じとってしまう。……日本社会の変革の道筋や展望は、政治力学関係への場当りの利用主義では決して生み出されえないと思っているからである」。自身の党派経験への反省も込められていたように思う。

その高橋さんが最後までこだわっていたのが沖縄だった。亡くなる数日前、パソコン操作を手伝ってとわれ助った人に出向いた。冒頭の『続全共闘白書』の回答を作成する作業だった。高橋さんは「つまらん質問するな」とブツブツ言いながらも一つ一つ真面目に答えていた（回答は本名での内容公表可としている）。「自主的な活動をしていますか」という問いに「日本国の沖縄への強権支配をやめさせるため、可能な限り動きたい」と回答、「沖縄の辺野古新基地阻止闘争にもっと関わりたいが、体力・金力の衰退が残念」とも書いている。そう答えながらも「もっと辺野古に行きたい」と口惜しそうに語っていた。そして一つの提案を聞いた。それは軟弱地盤が見つかった辺野古には莫大な税金が投入される、税金を使うなという裁判を起こせないかというものだった。税の観点で裁判を起こすことで辺野古の問題をヤマトの問題・関心事にできないか、阻止できないかという思いだった。

私はほぼ第一期で反天連を離れたが、それ以後のほうが高橋さんに多く会うようになったと思う。福島にも行った、辺野古にも行った。もちろん二人だけではない、パートナーの芥川さんや高橋さんの友人たちとの同行である。私は高橋さんの五歳ほど年下だが、高

校・大学時代と運動の端っこにいて、対党派闘争も経験したので、高橋さんの全共闘時代の話を興味を持って聞いた。その時代の友人も多く紹介された。「遊び」にもよく誘われた。「野沢温泉に行かないか」「和歌山のクルマ旅に行こう」と言われ、高橋さんと話すのが大好きだった私は声がかかるとにいにいそいそと出かけていった。ワイワイ遊ぶのが好きだった高橋さんは友人たちを結びつけるのも得意だった。先日の葬儀で、そうして知り合った一人から「僕たちの、カナメ」がなくなってしまうね」とボツリと言われた。そう、私たちは要を失ってしまったのだ。

最近では自分の闘争の原点と言っていた十・八羽田闘争を考える山崎博昭プロジェクトにも顔を出していると聞いた。そこでファンだった歌人・道浦母都子に会ったと嬉しそうに話していた。光州事件を描いた映画『タクシードライバー』ではいつも腰に下げたタオルで涙を拭いていた。人一倍涙もろく、闘う人が大好きだった。大の中ドラゴンズファンでもあった（葬儀のとき棺に中スボを入れた友人もいた）。いろんな高橋さんと会ったなあと思う。

高橋さんが亡くなったのは新元号が発表された日だ。屋近くにプールに行きサウナで倒れてということなので果たして新元号を知っていたのか……。発表から続くあのバカ騒ぎをどう思っただろう。

亡くなる数日前にも高橋さんと飲んだ。よく飲み、よく食べ、よく喋り、そしてやはりガハハと甲高く笑った。緩んだ差し歯が飛び出しそうになって慌てて押さえながら、笑い続けていた。

高橋さんはもういないのだと繰り返す。でも私はまだその世界に馴染めない。いつもせっかちだった高橋さん、でも、今回ばかりはせっかちすぎやしませんか。

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 104

「開明的な現代性」と神話・宗教世界の平和共存

去る四月二八日、天皇明仁の伊勢神宮参拝時に登場した「三種の神器」にまつわる、忘れるわけにはいかないエピソードがある。

一九四五年八月九日、ポツダム宣言受諾が否かを迫られた「最高戦争指導会議」に臨んだ天皇裕仁は、敗戦を挟んだ半年後の四六年三月、側近に対してその時の心境を次のように語った。「当時私の決心は第一に、このまゝでは日本民族は亡びて終ふ、私は赤子を保護する事が出来ない。第二には国体護持の事で、敵が伊勢湾付近に上陸すれば、伊勢熱田両神宮は直ちに敵の制圧下に入り、神器の移動の余裕はなく、その確保の見込が立たない、これでは国体護持は難しい、故にこの際、私の一身は犠牲にしても講和をせねばならぬと思った。」(寺崎英成『昭和天皇独白録』、初公表一九九〇年、現在『文春文庫』)。

この発言を知らないはずはない明仁は、この言葉が吐かれてから四〇数年後の一九八九年、別な言い方をするなら今から三〇年前の即位後の「朝見の儀」に際して、次のように語った。「大行天皇(裕仁のこと)には、御在位六十有余年、ひたすら世界の平和と国民の幸福を祈念され、激動の時代にあつて、常に国民とともに幾多の苦難を乗り越えられ、今日、我が国は国民生活の安定と繁栄を

実現し、平和国家として国際社会に名誉ある地位を占めるに至りました。裕仁自らが、ポツダム宣言を受諾したのは、「国体護持のために不可欠な三種の神器を確保する」道はそれ以外になかったからだとあけすけに語っているのに、明仁は「ひたすら国民の幸福を祈念する」虚像としての裕仁像を創り上げてしまった。歴史過程における裕仁の役割に関するこれ以降の明仁の言動は(一見したところ、安部晋三の路線と微妙に対立しているかに見えるものを含めて)この大枠を外れることはない。

そして冒頭に書いたように、去る四月天皇夫妻は退位の事前報告のために「皇室の祖先の天照大神がまつられる」(NHK・TVニュースの表現のママ)伊勢神宮の内宮に参拝したが、その際に、裕仁によってかくまで「大事に守られた」三種の神器のうち剣と勾玉を、持参した。それは「皇位を継承する証し」だから、徳仁に受け継がせるために、である。

ここ二ヵ月間ほどかけて私たちが見せつけられている「退位即位」に関わるいくつもの行事では、歴史的な実在性が疑わしい人物が登場したり、神話性に彩られた振る舞いが堂々と罷り通ったりしている。それが最終的には、明確な神道儀式に他



ならない、今秋一月に予定されている大嘗祭へと繋がっていくのである。すでにその座を去った天皇夫妻は、身についた現代的な発想とふるまい、「開明的な」その姿勢のゆえに、意外なまでに多くの人びとの心を捉えてきたことは認めなくてはならないだろう。その「開明的な現代性」は、「退位・改元・即位」行事に貼りついている拭い難い神話性・宗教性と好対照をなしつつも、ふたりの言動にあつては平和的に共存している。神話や宗教には、具体的な現実から自由に飛翔を遂げている点において、人びとの心に迫り、これを突き動かす初源的な力が秘められている。それが、社会の統治形態とは無縁なところで浮遊している限りは問題とするには当たらない。だが、日本の天皇制にまつわる神話性と宗教性は、明らかに、人びとにその力を及ぼす統治形態と密接な関わりを持っている。ひとが本来的に持ちうる論理と知恵に基づけば、眼前に展開されている代替わり行事に孕まれているごまかしと虚偽をいくつも指摘できようが、それを暴露したところで、私たちは、その虚構にいつそう深く拘束され、支配されてゆく人びとの群れを見るばかりである。

『文藝春秋』誌五月号には、天皇皇后と交流をもった一三人の証言が載っている。私がその作品に少なからず親しんできた詩人の吉増剛造や高橋睦郎の二人も、天皇ではなく皇后との触れ合いに力点を置いて書いている。高橋は「私たち日本国民は何という優雅で深切な国母を持ち、皇室を持っていることか」とまで書く。人をして、批評精神を喪失させてしまう天皇制の「呪縛の構造」を克服する道を探り続けたい。

(5月4日記)

34
マスメディアの
天皇帝

「象徴天皇教」の「朕朕詐欺」に抗して

——「壊憲天皇明仁」その32



天野 恵一

二〇一九年四月三〇日「退位礼正殿の儀」の安倍晋三首相の「国民を代表」しての感謝のことは、「国民に寄り添い、被災者の身近で励まされ、国民に明日への勇気と希望を与えてくださいました」。天皇明仁のことは「即位から三十年、これまでの天皇としての務めを、国民への深い信頼と敬愛をもって行い得たことは、幸せなことでした。象徴としての私を受け入れ、支えてくれた国民に心から感謝します」。五月一日、徳仁新天皇の即位儀礼のことは「顧みれば、上皇陛下には、即位より、三十年以上の長きにわたり、世界の平和と国民の幸を願われ、いかなる時も国民と苦楽を共にされながら……」。アホくさいからここまで。

福島原発の放射能被害に象徴される大被災の時代をつくりだした自民党政権。その歴史と現実を「平和と豊かさ」の時代という言葉にくるんで国家的に正当化し続けてきた天皇一族。「平成の三〇年」は、米軍とともに派兵する日本の派兵国家化への三〇年でもあり、イラクやカンボジアへの派兵政策を追認・正当化するために天皇夫妻が活躍した三〇年であったはずだ。天皇の「平和」は安倍政権の「積極的平和主義」のスローガンが戦争主義（大軍拡）の実態にかぶせたベールだとすれば、さらにその上にかぶせた超欺瞞的な「平和」の政治的ベールであるにすぎまい。

この欺瞞性は、徳仁の「三種の神器」をともなっ

た「剣璽等承継の儀」や「即位後朝見の儀」のプロセスにかぶせて「憲法にのっとり」とか「定めるところにより」とか「護憲」アピールを発してみせているところにも、ストレートに示されている。「現人神」の継承儀礼（象徴天皇教）の宗教儀礼と、政教分離原則（二〇条）は、どういう関係にあるというのか。

明仁からナルヒトに継承されているのは、この高度な政治的欺瞞性である。憲法を破壊する安倍政権と組んで、二代の象徴天皇の宗教儀式のド真ん中の「護憲発言」。全マスコミは、この発言を最大限に美化し、共感を組織すべく、こぞってクローズアップし続けている。（象徴天皇教）はマスコミじかけの「国営」「朕朕詐欺」教団である。巨額の税金の天皇一族への支払いを正当化するそのだましの手口は、金に糸目をつけぬ大がかりで執拗であり、かつ文化人をも動員した巧妙なものだ。私たち「終わりにしよう天皇制」「代替わり」反対ネットワークは、4・27から5・1までを「反天WEEK」と名づけ、連続抗議行動を、連日の右翼の暴力的介入をはねのけ強行し、「朕朕詐欺」のインチキにひっかかるな！と「代替わり」儀式全体への反対の声（天皇制はいらない！）を発し続けた。

私も、四月二七日の練馬集会、四月二八日の沖縄「デー」での講演（その前の他団体集会へのアピ―

ル）、四月二九日「反「昭和の日」」立川デモ、四月三〇日「退位で終わろう天皇制！新宿アピール（アルタ前広場）」、五月一日「新天皇いらない銀座デモ」と、フルに動きまわった。

その中で、かつて反天皇制運動の中で交流した、各地の人々と「ヤア何年ぶり」との交流がいくつもあり、はじめて反天行動に参加したという人も、話しかけられる体験を持った。五月一日の昼は「再稼働阻止全国ネットワーク」の事務局会議に参加したら、いっしょに銀座デモに行きたいというメンバーが四人もいた（こんなことははじめて）。「朕朕詐欺」の政治言説が大々的にふりまかれる状況への危機感は、それなりに広まっていることを実感した（予想通り、雨中のデモはふくれた）。

孤立を恐れず、闘い続けてきた「自覚的少数派」の政治詐欺に抗する思想は深化しており、各地で持続され、新しいエネルギーと合流してあらためて連帯の手を広げだしていることが実感できる行動であった。

「反天WEEK」の行動、それに前後する活動まで含めて、自分の体験を軸に、より具体的に記録する作業に、すぐ取りかかりたいと思う。もう一点、連帯アピールに行った集会で、かつて「反天連」で活動していた講師の、制度としての天皇制批判の一般論は以前のままで、天皇の「朕朕詐欺」言説を、そのまま肯定的にうけとるという珍妙な象徴天皇論にナマに出くわし驚いた。どうしたら、今さらこんなことにひっかかりたりできるのか。「怒り」というより「悲しかった」。そういう時代になっているのだ。

野火日誌

4月1日～4月30日

【4月1日】

秋篠宮◆家畜資源学術標本基金の総裁に就任。

新元号◆政府が、臨時閣議を開き「平成」に代わる新元号を「令和」と決定。明仁が改元政令に署名、公布される。

宮内庁人事◆宮内庁人事が公表される。

【4月2日】

天皇、皇族◆明仁、美智子の結婚60年と、明仁の即位30年を祝う宮内庁幹部ら主催の音楽会が、皇居・東御苑の音楽堂「桃華楽堂」で開かれ、明仁、美智子が鑑賞。

【4月3日】

明仁、美智子◆明仁に2日夜からせきの症状があり、3日に予定していた宮中祭祀などの出席を取りやめた。

【4月4日】

明仁、美智子◆皇居・御所で、訪日中のパナマのバレラ大統領夫妻と会見。

【4月5日】

明仁、美智子◆明仁が皇居・宮殿で、新任の駐日外国大使が持参した本国からの信任状を受け取る「信任状奉呈式」に臨む。

【4月8日】

秋篠宮、紀子、悠仁◆悠仁がお茶の水女子大付属中の入学式に出席。

【4月9日】

代替わり◆徳島県美馬市木屋平で、「大嘗祭」に献上される麻織物「鹿服」となる大麻の種まきが行われる。

【4月10日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が結婚60年を迎えたとして、皇居・宮殿「松の間」で祝賀行事が行われる。徳仁、雅子や秋篠宮、紀子をはじめとした皇族が出席。皇族に続いて、安倍晋三首相ら三権の長が祝意を伝える。タワ、愛子や悠仁が御所を訪れ、明仁、美智子に「祝い」のあいさつ。夜、徳仁、雅子と秋篠宮、紀子、黒田清子夫妻が御所に集まり、明仁、美智子と共に夕食。

代替わり◆明仁の即位30年を祝う超党派の「奉祝国会議員連盟」などが共催した祭典「感謝の集い」が、東京・国立劇場で開かれる。

【4月11日】

明仁◆皇居内の生物学研究所協の苗代に、うるち米のニホンマサリと、もち米のマングツモチの種もみをまく。

【4月12日】

明仁、美智子◆結婚を記念して1965年に開園した横浜市青葉区の自然公園「こどもの国」を訪問。

【4月13日】

明仁、美智子◆東京都中央区の高島屋日本橋店を訪れ、即位30年と結婚60年を記念した特別展「国民とともに歩まれた平成の30年」を鑑賞。

【4月15日】

明仁◆皇居・宮殿に衆参両院議長をはじめ両院の国会議員らを招いた茶会を開き、約50人と飲食を共にして懇談。宮殿「竹の間」で明仁が「お言葉」を述べた後、小食堂「連翠」に移動。

秋篠宮、紀子、眞子、佳子◆東京国立博物館の特別展「両陛下と文化交流——日本美を伝える」を鑑賞。

【4月17日】

明仁、美智子◆三重県入り。夕方に伊勢市に入る。ノートルダム寺院（大聖堂）で起きた火災に対し、明仁、美智子が見舞いのメッセージを出した。／冬の大雪などで甚大な被害を受けた北海道と秋田、山形両県に見舞金を贈る。

【4月18日】

明仁、美智子◆明仁の退位を報告するため、伊勢神宮の外宮と内宮を参拝。「三種の神器」の剣と璽（勾玉）を皇居から5年ぶりに携え、2人の侍従がそれぞれ持ち、明仁の前後を歩く。

【4月19日】

明仁、美智子◆帰京の途に就く。

代替わり◆4月30日の「退位礼正殿の儀」を国事行為として行うことを閣議決定。

「国賓」◆政府が閣議で、トランプ米大統領とメラニア夫人が5月25～28日の日程で「国賓」として訪日すると決める。

【4月21日】

皇居◆皇居・吹上御苑の自然観察会が開かれ、70歳以上の計約100人が参加。

靖国問題◆安倍晋三首相が、靖国神社春季例大祭に合わせて「内閣総理大臣 安倍晋三」名で「真榊」を奉納。

【4月22日】

代替わり◆宮内庁の西村泰彦次長が記者会見で、5月1日の新天皇即位に伴い、現在皇太子一家が住む東京・元赤坂の東宮御所を「赤坂御所」に改称すると発表。

明仁、美智子の住まいの皇居・御所は、「吹上仙洞御所」となると報道。

【4月23日】

明仁、美智子◆昭和天皇が埋葬されている武蔵野陵（東京都八王子市）を訪れ、明仁の退位に伴う儀式「昭和天皇山陵に親謁の儀」に臨む。

秋篠宮、紀子◆日本フィンランド外交関係樹立100周年記念「ムーミン展」MIMI AND THE STORY」を鑑賞。

代替わり◆超党派の国会議員らでつくる靖国参拝◆超党派の議員連盟「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」のメンバー約70人が、靖国神社を集団参拝。

【4月24日】

明仁、徳仁、秋篠宮◆徳仁が皇居・御所を訪れ、明仁、秋篠宮との懇談に臨む。

徳仁、雅子◆東京・上野の東京国立博物館特別展「両陛下と文化交流——日本美を伝える」を鑑賞。

【4月25日】

明仁、美智子◆ルクセンブルクの先代元首、ジャン前大公が死去したことを受け、東京都千代田区のルクセンブルク大使館

を弔問のため訪問。

徳仁、雅子◆皇居・宮殿を訪れ、「剣璽等承継の儀」と「即位後朝見の儀」の予行演習に臨む。

【4月26日】

明仁、美智子◆内閣府主催の「みどりの式典」に出席。

美智子◆日本赤十字社の名誉総裁退任に当たり、事業奨励のため、日赤に金一封

を贈る。

【4月27日】

徳仁、彬子◆徳仁が故寛仁の長女彬子の皇室文化に関する基調講演や、シンポジウムを聴く。

悠仁◆悠仁が通うお茶の水女子大付属中（東京都文京区）で、悠仁の机付近に果物ナイフのような刃物2本が置かれていたことが、警視庁への取材で分かる。

【4月29日】

悠仁◆お茶の水女子大付属中（東京都文京区）で、悠仁の机に刃物2本が置かれた事件で、男性が逮捕。

【4月30日】

天皇、皇族◆明仁が皇居・宮中三殿で、宮中祭祀。「退位礼当日賢所大前の儀」と「退位礼当日皇霊殿神殿に奉告の儀」。夕方、安倍晋三首相の「国民代表」の辞に

続き、在位中最後の「お言葉」を述べる。

徳仁や秋篠宮、紀子ら皇族が出席し、拝礼。美智子は参列を控えて御所で過ごし、雅子は体調を考慮し、欠席。明仁が正殿の儀を終えた後、宮殿や御所で皇族や宮内庁職員らからあいさつを受ける。／明仁の退位に当たり自民、立憲民主、公明各党が声明や談話を発表。

美智子の「真相」

人権と報道・連絡会定例学習会

四月一九日、水道橋のスペースたんぼで、「人権と報道・連絡会」の定例学習会が開かれた。今回は、文喜相韓国国会議長の「天皇謝罪要求」をテーマとして

もたれ、反天連の北野（私）が報告した。

報告内容は、私が本紙三月号「今月のAERC」に書いたような内容をベースにしたもので、国会議長の発言をめぐる、国内政治家を中心とした反応、天皇が実態として「元首」としてふるまい、海外からもそう見られている以上、共産党の志位和夫委員長が言うように「憲法上、天皇は政治的権能を持っていないから、謝罪は不可能」などと超然として済ませることはできないはず、結論としては「明仁は謝罪して退位し、天皇制もやめろ」というしかないだろうということを主張した。

そのうえで、戦後象徴天皇制国家の植

民地支配責任の問題を「継続する植民地主義」としてとらえる視点から、六五年の日韓条約における日本側の「植民地支配正當論」の問題、八四年の全斗煥以降、歴代の韓国大統領来日のたびに繰り返された天皇の「おこぼれ」の変化を取り上げ、それとそのときどきの政権の外交姿勢との関わりなどについて報告した。最後に、「代替わり」を迎える天皇制のあり方について

提議し、議論した。人権と報道・連絡会は、民主主義を破壊する政権への批判をなさないばかりか、それに積極的に加担するマスメディアのありかたを批判的に検証し続けてきたグループであり、天皇報道についても、反天連と共催で集会を持ったりしてきた。これからも

いろいろな協力していければと思う。

（北野誉）

浜松・天皇制を考える集会

四月二〇日、浜松でも天皇制を考える講座が開催された。人権平和・浜松が準

備した「代替わり問題浜松講座」だ。私

は「ここが問題！天皇代替わり」という課題を与えられ、参加者とディスカッションするという、とても有意義な時間をも

らった。

私からは、明仁天皇「退位」の経緯と問題を簡単におさらいし、「代替わり」のスタートの時点における天皇の「国政関与」問題、天皇制強化となる「退位特例法」成立等を時系列で簡単に整理し報告した。次のステージとして「退位・即位・大嘗祭」と続く諸儀式が、政教分離・主権在民・民主主義原則に反することを、いくつかの具体的な例を出して紹介した。こ

ういった、天皇の世代交代による大騒ぎが、天皇制の侵略戦争・植民地主義政策への責任という問題を希薄化していき、天皇の自由度が拡大していくことなども伝えた

かった。今回、議論したかったことの一つは、この「代替わり」期間中に行われる天皇制教育の問題であった。「万世一系」思想の普及、天皇とその一族が日本の「伝統・文化」を体現しているという妄想の普及、世襲制や家父長制の天皇一族を持

ち上げることによって、世襲制・家父長

制に正当性を与えてしまう教育、等々だ。会場からは、実にたくさんの意見がざつ

くばらんに出された。印象に残っているのは、「恩赦」をめぐる議論だ。この問題は私の頭の片隅に残っている。最後に浜松恒例の、主催者グループの歌。「今回は「君主制からの解放」を歌ってくれた。

「ミニニティカフェエロ」という素敵な会場が、議論を堅苦しいものとせず、参加者が自由に話しあえる場をつくり出していた。もっとこういつた議論の場がたくさんあるといいよね、と本当に思う。

（大子）

4.27-5.1 おわてんねっと「反天WEEK」をやりぬいたぞ！

今回の明仁退位＝徳仁即位という天皇「奉祝」漬けの日々を、反天皇の日々として打ち返していこうという趣旨で、「終わりにしよう天皇制！代替わり」反対ネットワーク（おわてんねっと）は連続行動として「反天WEEK」を呼びかけた。以

下、まとめて簡単に報告。

●四月二七日、「アキヒト退位・ナルヒト即位!?」今こそ問い直そう! 天皇制」集会

正確には、おわてんねっとに賛同している練馬の会の集会だが、反天ミツハスの初日として位置つけた。講師は伊藤晃さん。「象徴天皇制の正体」と題して多面的に報告。おわてんねっとからもアピール。参加者一〇〇名。

●四月二八日、「沖繩デー」集会

講師は反天連の天野恵一。「沖繩とアキヒト天皇の歴史」を丁寧に分析。一坪反戦地主会関東ブロックの与儀睦美さん、沖繩機動隊派遣住民訴訟の岩川碧さん、香港人靖国抗議見せしめ弾圧を許さない会の和仁廉夫さんからアピール。参加者一二〇名。

学習会報告 原武史『平成の終焉』

(岩波新書、二〇一九年)

この間、メディアに頻繁に登場する原武史の新刊。

二〇一六年八月八日のビデオメッセージについて分析を加えた部分では「憲法で禁じられた権力の主体になっていること」「国民」から排除される存在への着目、天皇警備や警備や規制による人権侵害の問題など、私たちがこれまで主張してきた内容と重なる部分も多い(摂政の

●四月二九日、「昭和の日」反対立川デモ

立川の緑町公園から昭和記念公園・昭和天皇記念館に向けたデモ。出発前、三多摩地域で活動を持続してきた人たちを中心にアピール。「日の丸・君が代」問題、「慰安婦」問題、ミニコミ活動、立川自衛隊監視テント村など。参加者一五〇名。

●四月三〇日、退位で終わろう天皇制! 新宿大アピール

新宿アルタ前の一等地を占拠し、反天龍の横断幕を広げてアピール。目の前に右翼が陣取り、間に警察が割って入る形となり、残念ながらピラまきはできず。しかし二時間以上にわたって、賑やかに参加者のアピールやおちんズスの歌、シュプレヒコールを続けた。そして五時から始まった明仁天皇退位式がアルタの大画面に映し出されると、式典の間中、抗議

のコールをあげ続ける。小雨にもかかわらず、一五〇名が参加して解放的な時間をつくりだした。

●五月一日、新天皇いない銀座デモ

新橋駅前のホールに集合。人がほとんど集まって会場に入りきれず。デモ出発前、女性と天皇制研究会、オリンピック災害おことわりリンク・鵜飼哲さん、民族問題研究・太田昌国さん、wam・渡辺美奈さん、直接行動」の仲間、romera連、即位大嘗祭違憲訴訟の吉田哲也弁護士のアピール。雨のなか、「終わりにしよう天皇制」の声を銀座に響かせる。この二五年くらいでは、反天皇制運動としては最大結集となる五〇〇名の参加。

とにかく、この状況に対して、「終わりにしよう天皇制」をメインスローガンと

「懇談会」についてなど、とてもおもしろかった。「昭和」と「平成」における彼らの行為の連続性と変化とが、具体的に整理されていて便利だ、という感想が多かった。

最後に「ポスト平成の皇室」がどうなるかが「予想」されている。それが明仁が望んだような「象徴天皇の務め」通になるかどうか。これは、徳仁天皇制を、われわれがどのようなものとしてとらえ、それとどう対決していくのかということを考える上でも参考になる。

一方、象徴天皇制の務めを天皇自身が定義づけたことに疑義を示しつつも、象

して一連の行動に取り組み、その全てにおいて私たちの予想を大きく超える結果をかちとれたことは、言うまでもなくこの「代替わり」状況に対して、疑問を感じる人が増えていることの反映だろう。もちろん、「代替わり」儀式はこの期間だけで終わりではない。秋の「即位礼」「大嘗祭」をゴールとして、天皇・トランプ会談をはじめ、新天皇のお披露目としての各地「巡幸」など、「奉祝」状況は続くのだ。これに対して私たちは行動を続けていく。これからもおわてんねっとへの注目と参加を!

(おわてんねっと/S)



4月19日(金) ●韓国国会議長発言「天皇は謝罪し、天皇制をやめろ」(集会の

徴天皇制を「深く考えてこなかった国民」という存在に理由を求め、「猛省する必要」を説くなど、批判的スタンスが一貫していない部分が随所にある。これは、この本のもとなったテキストの成り立ちと関係があるのでは、という推測も。明仁・美智子の「市井の人々との対話」をパトリオティズムに根ざしたナショナリズムとした部分も議論になった。

次回(五月一八日(火)、井上寛司「神道」の虚像と実像」(講談社現代新書)を読む。

(北野蒼)

真相参照

4月20日(土) ●ここが問題！天皇代替り(集会の真相参照)

4月24日(水) ●警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法 住民訴訟証人尋問(三回目)

●朝鮮半島と日本に比較・平和の確立を！

4月26日(金) ●運動史とは何か？

4月27日(土) ●【反天WEEK】アキヒト退位・ナルヒト即位！今こそ問い直そう！天皇制(集会の真相参照)

4月28日(日) ●【反天WEEK】沖縄デー集会(集会の真相参照)

4月29日(月) ●【反天WEEK】反「昭和の日」立川デモ(集会の真相参照)

●基地・軍隊はいらない！4・29集会

4月30日(火) ●【反天WEEK】退位で終わろう天皇制！新宿大アピール(集会の真相参照)

5月1日(日) ●改憲・天皇即位反対！非正規差別撤廃！闘うメーデーの復権を

●【反天WEEK】新天皇いない銀座デモ(集会の真相参照)

5月3日(金) ●5・3憲法集会

●2019野宿者失業者日雇労働者メーデー

3月1日(金) ●開催中●朝鮮人「慰安婦」の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館) / WAM 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催：同館

5月12日(日) ●改めて「5・15」を問う

新宿行動

15時〜16時デモ出発／新宿アルタ前(JRほか新宿駅)／山城博治／主催：沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック(090-3910-4140)

5月15日(水) ●続「IoT機器調査」の問題を探る

18時30分〜／かながわ県民センター708(JRほか横浜駅)／渡場大河／主催：盗聴法(組織的犯罪対策法)に反対する市民連絡会(090-6138-9593)

5月18日(土) ●即位の礼・大嘗祭違憲訴訟と政教分離

14時〜／日本基督教団深川教会(地下鉄木場駅)／酒田芳人／主催：政教分離の会(090-9820-5527)星出

5月19日(日) ●第32回反基地駅伝

10時〜／砂川秋まつり広場(JR立川駅からバス砂川4番下車ほか)／主催：同実行委員会(042-524-3244)河野

5月21日(火) ●なにが問題？植樹祭 新天皇の初の「公的行為」

18時30分〜／イーグルなごや視聴覚室(地下鉄名城線東別院駅)／天野恵一／主催：代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク(090-6468-5556)

5月22日(水) ●香港人靖国抗議見せしめ弾圧第3回公判

10時〜(傍聴締め切り9時30分)／東京地方裁判所429号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

5月24日(金) ●第32回政教分離訴訟全国交流集会

13時開場／日本キリスト教会館4F

(地下鉄早稲田駅ほか)／中嶋啓明、酒田芳人ほか／呼びかけ：即位・大嘗祭違憲訴訟の会、安倍靖国参拝違憲訴訟の会・東京、ノー！ハブサ(連絡先：sokudai@mail.zhihi.net)

5月25日(土) ●トランプ来日・天皇会

談反対！日米安保強化反対集会&デモ10時開場・12時デモ出発／ニュー新橋ビル地下2F(JRほか新橋駅)／主催：トランプ来日ーG20反対！実行委員会(03-3591-1301)破防法・組対法に反対する共同行動ほか

●オリンピックと放射能「復興五輪」という欺瞞

13時15分開場／武蔵大学1号館2F・1203教室(西武池袋線江古田駅)／倉澤治雄／主催：「オリンピック災害」おこたわり連絡会(Info@2020kotowai.net)

●「示そう辺野古NO！の民意を」全国総行動

14時〜／国会周辺(地下鉄国会議事堂前駅ほか)／主催：基地の県内移設に反対する県民会議(098-833-3328)ほか

5月26日(日) ●新天皇・トランプ会談反対新宿デモ

14時20分集合・15時デモ出発／新宿アルタ前(JRほか新宿駅)／主催：終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク(090-3488-0263)

5月28日(火) ●2019ヤスクニキヤンドル行動事前学習会第2回 ヤスクニと植民地主義

18時30分〜／在日本韓国YMCA・3F(JR水道橋駅ほか)／趙時顕／主催：ヤスクニの行動実行委員会平和の灯を！ヤスクニの闇へ(03-3355-2641)

5月31日(金) ●盗聴・監視社会に反対 私たちのプライバシーは守れるのか？

18時30分〜／かながわ県民センター304(JRほか横浜駅)／指宿信／主催：盗聴法(組織的犯罪対策法)に反対する市民連絡会(090-6138-9593)

6月7日(金) ●朝鮮半島と日本に非核・平和の確立を！ 集会デモ

18時30分〜19時30分サウンドデモ／日比谷野外音楽堂(地下鉄霞ヶ関駅ほか)／主催：同実行委員会(連絡先：03-3363-7662)ピースボートほか

6月8日(土) ●朝鮮半島と日本に非核・平和の確立を！ シンポジウム

13時開場／星陵会館(地下鉄永田町駅ほか)／要事前申込み(mail:kenpou@amie.ne.jp)／主催：同実行委員会

6月9日(日) ●練馬駐屯地抗議デモ

13時集合・14時デモ出発／徳丸第二公園(東上線東武練馬駅)／主催：反安保・反自衛隊・反基地を闘う北部実行委員会ほか(03-3961-0212)

6月11日(火) ●明治公園オリンピック追い出しを許さない国賠訴訟第5回口頭弁論

11時30分〜／東京地方裁判所706号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)